



バッハの森通信

第142号
2019年
1月20日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

待ち望んだ みどり児の誕生

喜びの分かち合い

新年、おめでとうございます。今年も皆様から年賀状をいただき、それぞれ元気にお過ごしの様子を嬉しく拝見しました。特にお子様たちを中心にした家族写真は、子どもたちの成長ぶりが一目瞭然で、しばし見入りました。外国の友人からはクリスマス・カードをいただきましたが、その中に珍しいカードがあったので、ご紹介します。

* * *

それはドイツの友人からいただいたクリスマス・カードで、表はごく一般的な絵です。わらの上に乗かされた赤ちゃん（生まれたばかりのイエス）をヨセフとマリアが見つめ、奥の方からろばと牛がのぞき込み、その上で羊飼いたちが天を仰ぎ、またその上で大天使を中心に天使たちが讃美の音楽を奏でています。まさにクリップです（本号5～6頁を参照してください）。珍しいのは裏面で、ただマタイによる福音書1章1節以下のラテン語の文章なのです。それに、グレゴリオ聖歌に用いられる記譜法の楽譜がついていますから、朗唱用のテキストと思われる。おそらく中世の修道院で用いられていたものかと推測しますが、残念ながら、いつ、どこで作成されたか分かりません。

そこで、マタイによる福音書1章1節以下ですが、これはイエス・キリストの系図で、計42代の人々の名前が列記されています。何かためになることが書いてある書物かな、と期待して新約聖書を初めて開いてみたら、いきなり聞いたこともない仮名の名前がずらずら並んでいるだけなので、読むのを止めたという話を聞いたことがあります。確かにこれは、旧約聖書が伝える物語を知っていることを前提にした系図なので、いきなり読んでも分からなくて当然です。そうかと言って、先ず旧約聖書を読みなさいとは申しません。

田舎の家の仏壇に先祖代々のお位牌が、墓地に先祖代々のお墓があることを思い出してください。これは、ご先祖様がいて現在の自分があることを思い出させる立派な風習です。問題のクリスマス・カードは、誕生したイエス・キリストは、42代にも及ぶ先祖たちが神の約束を信じて待っていた赤ちゃんだ、ということを示しているのです。いささか違う話ですが、自分の存在もイエス・キリストの存在も、代々の積み重ねと継続の結果として生じた事実である、という点では同じではないでしょうか。

* * *

同様に、キリスト降誕の様子を人形の模型で表したクリップは、赤ちゃんが生まれたことを親類や友人に知らせる年賀状の家族写真のようなものと言えないでしょうか。確かに、ナザレのイエス誕生の背景には、彼の系図が語る長い特別な歴史があり、クリップはそのすべてを示しています。しかし、待ち望んでいた赤ちゃんが生まれた両親、家族、友人一同の喜びについては、どの赤ちゃんも同じなのです。

今年のお正月は、クリップとイエスの系図を組み合わせさせたクリスマス・カードと、皆さんからいただいた年賀状の家族写真を眺めながら、イエス・キリストの降誕を祝うクリスマスが、キリスト教の枠を超えて世界中でお祝いされるお祭りに広がった一つの理由が、このような普遍性にあるのかなと考えた次第です。

今年、35年目の活動を始めるバッハの森は、バッハの音楽を中心に、広く普遍的な喜びを分かち合う仲間が集まりです。さらに多くの皆様のご参加をお待ちしております。（石田友雄）

バッハの森・創立記念コンサート

3月24日（日）午後3時15分

合唱：バッハの森クワイア（指揮：比留間恵）

オルガン：鈴木由帆

ハンドベル：バッハの森ハンドベル・クワイア

お姿を現してください

羊飼いを見失った羊の群れの叫び

*昨年12月9日に、バッハの森で開かれた「クリスマス・コンサート」で朗読されたメディタツィオです。

最初のクリスマス、イエス・キリストの降誕は、ベツレヘム郊外の野原で、夜通し羊の群れの番をして野宿をしていた羊飼いたちに天使が知らせた、とルカによる福音書が伝えます。聖書の物語で、羊飼いと羊の群れは、しばしば神、或いは、指導者と民衆を象徴しています。キリストの降誕が「すべての民の喜びになる」と天使が語りますから、羊は全世界の民衆、羊飼いたちはその指導者たちを代表しているのでしょう。

羊飼いに護られて生きていた羊

ここで、先ず、私たち日本人にはなじみが薄い羊飼いと羊の関係をご紹介します。羊の立場からこの関係を語る詩篇23篇は、神様である主が私の飼い主だから、私は何一つ不自由しない。青草の野原で食べ物を与えてくださり、水辺に連れて行って水を飲ませてくださる。そこに行く途中、恐ろしい場所を通るときも、護ってくださるから怖くない、と大変具体的に、どのように羊飼いに護られて羊が生きているか、ということ語ります。なお、この詩篇に基づくコラールを、この後すぐ一緒に斉唱します。いずれにしても、このように、古代オリエントでは、有史以来、羊は家畜として人間に飼育されてきた動物で、野生の羊はいませんでした。羊飼いがいなければ、羊は生きていけない動物だったのです。この状況を前提として、クワイアが最初に演奏する合唱をお聴きください。歌詞は詩篇80篇の冒頭です。

お姿を現してください

羊の群れが、青草のある野原、飲み水のある水辺に連れて行かれる途中、荒野の真ん中で飼い主を見失い、途方にくれている姿を想像してください。自分がその群れの中にいると想像すれば、羊の群れの思いは真に迫ってきます。野獣が襲ってきても護ってくれる飼い主がいなくてもありません。どっちに行けば、食べ物がある野原に行けるのか、どうすれば飲み水にありつけるのか、どうしたらいいか全く分からないまま、荒野の真ん中で立ち尽くす羊の群れができることは、

ただ一つ、姿を消した飼い主に向かって、私たちの願いを「聞いてください」、ドイツ語で「ホーレ」“HÖRE!”と叫び、その願いは、「お姿を現してください」、ドイツ語で「エァシャイネ」“ERSCHEINE!”と叫ぶことだけでした。

この詩篇は、ここで羊飼いと羊の群れが何を象徴しているか、きちんと語ります。先ず、羊飼いは、ヨセフに代表される選民イスラエルを護る主なる神です。しかも、この神は、選民イスラエルの証しであるモーセの律法を納めた箱を護る天の怪獣ケルビムの上に座っていると言います。ここで選民や律法などの説明は省略して一言で言えば、神は律法によって民衆の秩序を保ち、イスラエルを外敵から護っている方なのです。この詩篇が、紀元前8世紀末に北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされた歴史を背景として作詞されたと考えれば、これは国を失い、守護神を見失った人々が、それ以来イエスの時代まで、実に800年にわたって叫び続けて来た祈りであったと考えられます。

永続するダビデの王国

本日のコンサートは、カンタータを締めくくる詩篇23篇のコラール合唱で前半を終わり、それに続くパストラレのオルガン演奏によって後半を始めます。コンサート後半では、ルカによる福音書の降誕物語を朗読しながら、その合間合間に、古くから伝わるクリスマスの歌を歌います。先ず、「みどり児、生まれぬ、ベツレヘムに」、次に「エサイの根より生(わ)い出(げ)たり」と、誕生したイエス・キリストについて歌いますが、言うまでもなく、「ベツレヘム」はダビデの故郷、「エサイ」はダビデの父の名です。ダビデは紀元前1000年頃、エルサレムを首都に定め、ユダ・イスラエル複合王国を建国した大王です。そのとき、主がダビデに、お前の王国と王座は永遠に続くと言ったと信じる信仰を、その後400年続いたユダ王国の人々は継承し、紀元前6世紀にバビロニアに滅ぼされて王国が滅亡、ダビデの王座が断絶した後になっても、いつの日かダビデ王家の子孫から王国を再建する救い主が現れると信じ続けました。いわゆる「メシア思想」乃至は「メシア信仰」です。

この「メシア信仰」に基づき、最初のキリスト教徒たちは、ナザレのイエスこそ、1000年前にダビデに約束され、紀元前6世紀の亡国後、500年以上も待ち続けたメシアであったと信じ、その信仰を広めた人々でした。ですから、受胎告知をした天使ガブリエルは、「この子に神である主は彼の父ダビデの王座をくださり、その支配は終わることがない」とマリアに告げ

ます。実際、イエスはしばしば民衆から「ダビデの子」、すなわち「ダビデ家の跡継ぎ」と呼ばれています。そもそも「キリスト」という称号は、ヘブライ語の「メシア」のギリシャ語訳で、「油注がれた者」という意味です。これは、皇太子がダビデ家の新しい王に即位したときに油を注がれた儀式に由来します。

天から降誕したイエス・キリスト

ただし、イエスの直弟子たちを初めとする最初のキリスト教徒たちは、かつてダビデが武力で王国を統一し、敵対する周辺諸国を征服したように、イエスが、当時ユダヤを占領していたローマ人を武力闘争によって追い払おうとしたとは考えていませんでした。その証拠に、メシアであるイエスがダビデの家系に属することは、父、ヨセフの系図によって示し、母マリアは許婚のヨセフによらず、聖霊によって身ごもったと語ります。これは、イエスは間違いなく人間の女マリアから生まれたが、同時に天から来た人であったという信仰の表現に他なりません。先程、「キリスト」はヘブライ語の「メシア」のギリシャ語訳だと申しました。しかし、厳密に言えば、「キリスト」と「メシア」の意味は同一ではありません。「メシア」は主なる神が派遣するダビデ家の子孫であり、あくまでも一人の人間です。しかし「キリスト」は、主なる神と全く同じ本質を持ち、神と全く同じ考えを持つ「神の独り子」が人間になった姿なのです。

では、ナザレのイエスが神と同じ本質と同じ考えを持つ「神の独り子」であったという信仰は、どこから生じたのでしょうか。その源(ミソト)は、ナザレのイエスの生き方と死に様を目の当たりにした弟子たちが、彼の教えから受けた強烈なインスピレーションであったと考えられます。「お前の敵を愛せ」、「天の父が完全であるように、お前たちも完全な者になれ」、「天の父の御心が、天におけるように地上でも行われるように」等々の教えや祈りは、地上ではどうも実行不可能と思われる天の王国の教えであり、生き方なのですが、これを本気で実行しようとした人がイエスでした。荒野で飼い主を見失い、「お姿を現してください」、「ERSCHEINE!」と叫んでいた人々にもイエスは応えます。「私は良い羊飼である」。そして、地上では誰も行かない、天の王国の生き方に従って、「良い羊飼」は羊のために命を捨てると教え、実行したのです。

いと高きには栄光、地には平和！

1000年前にダビデに、主なる神がした王朝不滅の約束が、イエス・キリストの誕生によって実現したと考

えた人々には、天と地が一つになって祝う大きな喜びを歌う天使の大軍の讃美が聞こえました。「栄光、いと高きにいます神にあれ。地に平和、御心に適う人々にあれ」。それから2000年たった今、私たちも、羊のために命を捨てた良い羊飼いであったダビデの子の誕生を祝い、天使の大軍と声を合わせようとしています。しかし、本当は、飼い主を見失い、「お姿を現してください」「エアシャイネ」「ERSCHEINE!」と叫ぶ羊の群れと一緒に叫びたい現実に直面しているのではないのでしょうか。ですから、いや、それだからこそ、「地に平和」を実現する良い羊飼いの出現を待ち望みながら、天使の大軍と共に「いと高きには栄光、地には平和」と歌おうではありませんか。(石田友雄)



バツハの森会員有志製作

寄付者芳名 (2018. 10. 1~12. 31)

一般寄付

下記の方々から計 165,257 円のご寄付をいただきました。
比留間恵、無名氏 (CD, DVD 売上)、石田友雄 (書籍購入)。

建物維持積立寄付

下記の方々から計 65,000 円のご寄付をいただきました。
當眞容子、宮嶋稔夫、大和田みどり、鈴木真粧子、岡本由紀子、鳥塚由帆、松下雅弘、熊谷徹、伊藤香子、宮治陽子、石井和子、海東俊恵、田中明彦・とみ子、藤森いづみ、野末明子。

オルガン寄付

下記の方から 3,000 円のご寄付をいただきました。
岡本由紀子。

2018年・バッハの森のクリスマス
クリスマス・コンサート (12月9日)

音楽の力が及ぼす 不思議な体験

バッハの森のコンサートには、欠かさず足を運んでいます。そのたびに新しい感動があります。また、この度のクリスマス・コンサートでは、「音楽の力が及ぼす不思議な体験」をしました。その様子を、コンサートの流れを通してご報告したいと思います。

ハンドベルの点鐘がおごそかに開演を告げると、続いて鈴木由帆さんのオルガンによる、ブクステフーデのプレリューディウムが奏楽堂を満たしました。静かな気持ちになったところで、「私たちに一人の子が生まれる」と始まるイザヤ書9章5,6節が朗読されました。プログラムには、ルター訳のドイツ語聖書本文と友雄先生の日本語対訳が載せられており、ドイツ在住のうちに碑文などで見かけたドイツ語の綴りに興味をそられました。それに友雄先生の日本語訳には、何度も復唱したくなるようなリズムを感じました。

続いて「いと高き神に／御栄えとわに」を皆で斉唱しました。申すまでもなく、イエス・キリスト降誕の晩に、ベツレヘム郊外で天使の大軍が歌った「グローリア」です。思い切り声を出して歌うのは楽しいものです。同時に、これまで何度も歌ったコラールですが、今回も胸に熱いものを感じました。

続いて友雄先生の「メディアタツィオ」を聞きました。そこで私が初めて認識したことが語られました。「羊」は「羊飼」なしでは生きられない動物だったということです。ですから、羊飼いの姿を見失った羊の群れは、羊飼いに向かって「お姿を現してください」、ドイツ語で「エアシャイネ」(Erscheine)と叫ばずにはいられなかったのです。この状況が、これからクワイアが合唱するJ. S. バッハのカンタータ「あなた、イスラエルの羊飼いよ、聞いてください」(BWV 104)第1曲の背景だと説明されました。なるほど、と納得して、私も心の中で「エアシャイネ」(お姿を現してください)と叫んでみました。すると、不思議に、気持ちが落ち着くのを感じ、同時に、羊飼いに対する感謝の気持ちがわき起こってきました。

日常の些細なことに心を痛めたとき、悲しさや寂しさに遭遇するとき、どちらを向いたらよいのか不安から逃れられないとき、それに嬉しいことを伝えたいと

きにも、この「エアシャイネ」(お姿を現してください)は、安心感と喜びを与えてくれます。そう言えば、子どものとき、今は亡き母と一緒に喜んだり、心を痛めたりしてくれた感覚を思い出し、得も言われぬ安心感に包まれました。同時に自分一人の力で生きていくと「勘違い」していることに気づかされました。「エアシャイネ」(お姿を現してください)は、謙虚さと肩の力を抜いて前を向くことを示唆してくれます。

続いて2曲目の会衆斉唱「主はわが飼い主」が歌われました。ここで、おや?と思うことがありました。1曲目のコラール「いと高き神に／御栄えとわに」と旋律が同じなのです。でも、どちらのコラールにもびったり合った旋律に思えるので不思議です。また、この旋律が身体に染み込んでいるおかげで、音符と照らし合わせる作業もなく、とても楽しく歌えました。このことが、冒頭の「音楽の力が及ぼす不思議な体験」につながっていることは、改めてお話しします。

ここで、J. S. バッハのカンタータ「あなた、イスラエルの羊飼いよ、聞いてください」(BWV 104)の第1曲と終曲「主はわが飼い主」が、クワイアとオルガンの伴奏で演奏されました。クワイアの合唱する声とオルガンの音が一つになった響きは、バッハの森奏楽堂でしか体験できないものです。まるで奏楽堂自体が大きな楽器であるかのように一つの響きに包み込まれました。この終曲は、先ほど私たちが斉唱したコラールなので、心の中で一緒に歌えました。

コンサート後半は、D. ツィボリ作曲の「パストラレ」のオルガン演奏で始まり、M. プレトリウスが編曲したクリスマスの歌「みどり児、生まれぬ、ベツレヘムに」と「薔薇が生い出ました」の合唱とオルガンを挟んでルカによる福音書2章1～20節の降誕物語が3回に分けて朗読され、クワイア指揮者、比留間恵さんのグレゴリオ聖歌朗唱「今日、キリストがお生まれになった」に続き、「イン・ドゥルチ・ユビロ(喜び溢れ)」をハンドベルの演奏とオルガン伴奏によって皆で斉唱しました。

最後にM. プレトリウス編曲のコラール「いかに麗しく輝くことでしょうか、明けの明星は」の合唱を楽しみましたが、ここで再度、おや?と思うことがありました。1番と6番のドイツ語の歌詞の間に、日本語の歌詞が挿入されているのです。これは今までになかったことで、友雄先生と恵さんの新しい試みなのでしょうか?原語で聴きたい気持ちと、日本語が聞こえてくる親しみと安心感、その両方が満たされた瞬間は、とても心地よいものでした。

コンサートが、最初に斉唱したコラール「いと高き神に／御栄えとわに」のJ. S. バッハ編曲のオルガン曲（BWV 676）の演奏で閉じられたとき、オルガンの響きを聴きながら、最初に斉唱したときの感動がよみがえりました。

さて、ここで冒頭に申し上げたこのコンサートから受けた「音楽の力が及ぼす不思議な体験」についてお話しします。コンサートの前半で、2回の会衆斉唱と合唱で歌われた同一旋律の2曲のコラールは、内容は違うのにどちらにもびつたりの旋律であることを感じましたが、その旋律が最後のオルガン編曲でも繰り返えされたことにより、最後にこの旋律が身体に溶け込み、帰宅後も感動を思い起こすように口ずさんでいました。そのとき、同一旋律の2曲のコラールをコンサートの骨組みに据えたことは、意図されたことだったと気づきました。これだけいろいろな形で同一旋律が繰り返えされることにより、この2曲のコラールをテーマとするクリスマス・コンサートが身近なものになったのです。

バッハの森のクリスマス・コンサートには、毎回、感動をもたらす新しい試みがなされ、心を打たれます。また、世界中の人々が、長い歴史の中で溢れる感謝の気持ちを表すために美しい旋律を生み出し、各地の言葉に翻訳して歌ってきたことを考えると、いかに人々

がこの出来事を語り尽くせない喜びと感謝の思いで伝え、残そうとしてきたか分かります。そして、自分もその一員であると思うとき、緊張感と、惑わされない感覚を養うことの大切さを感じます。

今やネット社会になり、情報が氾濫し、善悪の区別がつけづらく、メディアに踊らされ、短いスパンで効果を狙う勝ち組がもてはやされ、他方、心ない言葉や中傷が飛び回るなか、この長い歴史を経ても変わりなく、世界中の人たちに喜びと感謝をもって伝えられてきた出来事の存在に心を打たれます。人の一生は短いものですが、その感動をつないでいくことの大きさは計り知れなく、その一部でも担えれば、それは大きな喜びになります。バッハの森は、このような喜びをつないでいける貴重な場所だと思います。（平賀邦子）



-2018年・バッハの森のクリスマス
クリスマスの音楽会（12月15日）

盛り沢山の 楽しいプログラム

今年の初夏にバッハの森の会員になり、今回、初めて「クリスマスの音楽会」に参加しました。12時半の開場と同時にお客様が来館し、その人の流れが開演直前まで途切れることがなかったので、用意していた座席では足りず、急きょパイプ椅子を壁際まで追加するほどでした。小さなお子さんたちも大勢来てくれました。

ハンドベルの点鐘で開始した音楽会は、声楽アンサンブルがバッハの森の素敵なパイプオルガンの伴奏で厳かなハーモニーを聞かせてくださった後で、小学生の子どもたちのハンドベル・リンガーズが「高きみ空より」を演奏しました。小さな子どもたちがそれぞれ集中して一つの曲を奏でる様子はとても印象的で、会場の大人も子どもも聞き入っていました。

再び声楽アンサンブルとオルガンで、古いラテン語のクリスマス・キャロルの演奏の後で、絵本「クリスマス物語」の朗読がありました。ブライアン・ワイルドスミスという方の絵と文章で、非常に綺麗な絵を朗読と共にカメラで撮影してプロジェクターによって大きなスクリーンに投影して見せてくださいました。朗読も、セリフの部分は子どもたちが分担して読んだので、絵本の清らかな印象がそのまま伝わってきました。

それから、バッハが作曲したクリスマスの歌「まぶねのみそばに」のソプラノ独唱の後で、別所香苗さんが「クリッペ」についてスライドを見せながらお話しをしてくださいました。日本では余り知られていない「クリッペ」という言葉を、私も初めて知りました。別所さんの分かり易い説明によると「クリッペ」は、もともとドイツ語で「飼い葉桶」のことですが、お生まれになった赤ちゃんのイエス様が飼い葉桶に寝かされたというお話しにちなんで、赤ちゃんが寝かされた飼い葉桶を中心に、マリアとヨセフ、羊飼いたち、3人の博士、或いは王様などの人形でイエス・キリス

ト降誕の場面を表した模型を意味するようになりました。

バッハの森には世界各地で作られたクリップが多数所蔵されており、その一部が常時ケースに並べて展示されていますが、このお話しを聞くまでは、それほど興味を持ってよく見ようとはしませんでした。大写しにされたクリップのスライドと一緒に、クイズを交えながら、作られた国、その国ならではの素材などについて説明を聞くと、ひとつひとつのクリップに個性があり可愛らしく感じられるようになりました。

私が参加している器楽アンサンブルは、「鐘のキャロル」という厳かな曲を演奏しましたが、ヴァイオリン、チェロ、チェンバロだけでは曲想を表現するのが難しく、完成度は今一だったかもしれません。それでも、その後で、声楽アンサンブルと一緒に合奏した「ディング、ドン、鐘は鳴る」は楽しいきょうきとした曲で、楽しく弾くよう心掛けました。華やかな演奏になったと思います。最後は出演者全員で、14世紀のドイツ語/ラテン語のキャロル「イン・ドゥルチ・ユビロ（喜び溢れ）」を合唱、合奏しました。

このように「クリスマスの音楽会」は、クリスマスに相応しい素敵なお曲と面白い演出が盛り沢山のプログラムでした。もうネタ切れではないか、来年の音楽会はどうなるのだろう、と余計な心配をするほどでした。来年も是非参加したいと思っています。

私が参加している器楽アンサンブルは、月に2回程度の練習しかないので、なかなかバッハの森になじめた感じがしませんが、クリスマスの音楽会で皆さんと一緒に演奏し、その後でバッハの森の会員と家族のための祝会に参加したことで、やっと一員になれたような気がしています。今回のプログラムで個人的に一番感動した曲は、声楽アンサンブルの皆さんがオルガン伴奏で歌った「みどり児、生まれぬ、ベツレヘムに」で、いつか歌ってみたい歌です。これから声楽アンサンブルにもチャレンジしてみよう、と思っています。（植田摩耶）



各国のクリップ

フィンランド



ネパール



ブラジル



フィリピン



イタリア



力を合わせて バッハの森を知らせた音楽会

「こんなお知らせが届いたけど、どうかな？」と夏休みが明けた頃、友雄先生から一通の封書をいただきました。それはつくば市文化芸術課からのもので、11月に開かれる市民文化祭出演のお誘いでした。以前から、魅力溢れるバッハの森を知らない人が、まだ大勢つくばにいらっしゃるのは、何ともったいないことか。どうにかバッハの森を広く知らせる方法はないものかしら、と思っていた私は、「是非参加しましょう」と即答しました。バッハの森の活動を広く知らせる絶好の機会だと思ったからです。

つくば市民文化祭は、11月3日、4日に二日間にわたって、つくば市のあちこちの会場で開かれる、さまざまな文化活動の催しです。なかでもノバホールで開かれる「ノバホール音楽会」は、1980年代に筑波研究学園都市建設期に創設され、今年で41回目を迎える歴史のあるイベントです。そこで私たちは「ノバホール音楽会」への参加に向けて動き始めました。

バッハの森の通常の活動とは別に、急きょ有志メンバーを集め、何を発表するか、話し合いから始まりました。紆余曲折の末、岩淵倫子さん、當眞容子さんと一緒に私が指導している小学生のハンドベル・クラブ、「バッハの森・ハンドベル・リンガーズ」が「荒野の野バラ」、バッハの森・声楽・器楽アンサンブルのメンバー有志で「ユビラテ・アーメン」の輪唱とハンドベルの演奏をすることに決まりました。小学生の皆さんは、1ヶ月に1回の練習時間しかありませんが、その上達ぶりには毎回驚きます。しかもこの曲は、8月19日に開いた「夏休みの音楽会」でも発表しましたから、ノバホールの大舞台でもちゃんと演奏できると信じていました。大人の有志グループは7人で、練習回数は3回しかとれませんでした。ハンドベルのベテランと、毎週、合唱で鍛えている仲間ですから、短時間で完成度の高い音楽になりました。

さらに嬉しいことに、音楽会実行委員の方から「皆で歌おう」コーナーで、ハンドベルを伴奏にして客席の皆さんに歌わせていただけないか、というご依頼をいただきました。曲は皆さんが慣れ親しんでいる「ふるさと」ということで、バッハの森クワイア指揮者の比留間恵さんが、ハンドベルのためのとても美しい編

曲を作ってくださいました。そこに海東俊恵さんのピアノと古屋敷憲之さんのチェロが加わり、バッハの森らしい素敵なアンサンブルが整いました。また「皆で歌おう」コーナーに先立ち、会場の皆さんの心と体をほぐす「体操」の時間もバッハの森で受け持つことになり、恵さんの「体を動かし、愉快地に歌い、楽しくハモる」というアイデアを携えて、「ノバホール音楽会」に向かいました。

午後1時半に始まった第3部の7番目が、バッハの森の出番です。ハンドベル・リンガーズの子どもたちがハンドベルを鳴らしながら、舞台左手の階段を登って行くと、これまでの出演者がみんな大人ばかりだったせいでしょうか、会場全体の雰囲気は和やかに変わっていきます。自分たちの演奏が無事に終わり、続く「皆で歌おう」と「体操」までそのまま舞台に残る約束を忘れて退場しかけた子どもたちが、後ろから呼び止められ慌てて舞台に戻る姿に、客席のあちこちから笑い声がこぼれます。恵さんは、会場の皆さんに「ハロー、ハロー」とS・A・T・Bドミソドで声を出してもらい、見事にハモったところで、準備した伴奏により会場が一つになって「ふるさと」を歌いました。本当に素晴らしい時間になりました。

後日、音楽会実行委員の方から「昨日はかわいくて素晴らしい澄んだ音色のハンドベルの演奏と、〈皆で歌おう〉コーナーで会場を盛り上げてくださり、本当にありがとうございました。ハンドベルの澄んだ音色で癒やされ、体操をしながらの合唱は、会場中がとても楽しそうにやっていたらいいな」というメールをいただき、ふっと肩の荷が下りた思いでした。そしてバッハの森の魅力は、荘厳なパイプオルガンや響きの豊かな奏楽堂だけではなく、ここに集まり活動するメンバーたちにこそあるのだと感じました。

最後に、通常の活動とは別に、この音楽会のための特別練習に時間を割いてくださった有志の皆様を初めいろいろな形でこのプロジェクトを応援して下さった皆さんに感謝いたします。バッハの森の魅力をアピールする千里の道の最初の一步になったかしら、とほっとしています。(別所香苗)



10. 4, 11, 18, 25 **運営委員会** 参加者各 5 名。
 10. 6, 13, 20 **合同練習** (つくば市民文化祭音楽会)
 9, 17, 6 名。
 10. 7 **外周剪定** 参加者 2 名。
 10. 15~22 **賃貸棟外壁塗装** (ニットウ工業)。
 10. 21 **フォルテピアノ・リサイクル**
 「ブロードウッドの響き」(岩村かおる)
 参加者 58 名。
 11. 1 **移動設置** (コピー機) 2 階から 1 階事務室へ。
 11. 4 **つくば市民文化祭音楽会** (ノバホール) 参加者
 14 名。
 11. 8, 15, 22, 29 **運営委員会** 参加者 3, 4, 4, 5 名。
 11. 30 **クリスマス準備** (リース作り) 参加者 3 名。
 12. 1 **総練習** (クリスマスの音楽会) 参加者 11 名。
 12. 6 **クリスマス準備** (飾り付け) 参加者 5 名。
 12. 13, 20 **運営委員会** 参加者各 5 名。
 12. 9 **クリスマス・コンサート** 参加者 38 名。
 12. 15 **クリスマスの音楽会** 参加者 63 名。
クリスマス祝会 参加者 33 名。
 12. 23~2019. 1. 7 **冬期休館**

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究 コラールとカンタータ (JSB)

10. 6 三位一体後第 14 主日のカンタータ「感謝を捧
 げる者、彼は私を称える者」(BWV 17) ; コラール
 「主を誉めまつれ、わが内なるもの」。オルガン :
 J. S. バッハ「父親が彼の小さな幼な児を憐れむ
 ように」(BWV 17/7) 並木聡子。参加者 9 名。
 10. 13 第 440 回、D. ブクステフーデ「さあ、私の魂
 よ、主を誉め称えよ」並木聡子。参加者 11 名。
 10. 20 三位一体後第 15 主日のカンタータ「神がなさ
 ること、それは善くして下さる事です」
 (BWV 99) ; コラール「御神の御業はことごと
 く善し」。オルガン : J. S. バッハ「神がなさる
 こと、それは善くして下さる事です」
 (BWV 99 /6) 笠間きよ子。参加者 7 名。
 10. 27 第 441 回、J. L. クレプス「神がなさること、
 それは善くして下さる事です」笠間きよ子。
 参加者 10 名。
 11. 10 三位一体後第 23 主日のカンタータ「不誠実な
 世よ、私はお前を信頼しない」(BWV 52) ; コラール
 「主に望みかけぬ」。オルガン : J. S. バッハ
 「あなたに私は望みをかけました、主よ」
 (BWV 52/6) 安西文子。参加者 11 名。
10. 17 第 442 回、J. S. バッハ「あなたに私は望みを
 かけました、主よ」(BWV 712) 安西文子。参加者
 9 名。
 11. 24 アドヴェント第 4 主日のカンタータ「お前たち
 道を備え、大路を整えよ」(BWV 132)。オルガン :
 J. S. バッハ「あなたの慈しみによって私たちを
 死なせ」(BWV 132/6) 金谷尚美。参加
 者 : 11 名。
 12. 1 第 443 回、J. S. バッハ「主なるキリスト、神の
 独り子」(BWV 601) 金谷尚美。参加者 12 名。

学習コース

- バッハの森クワイア (混声合唱)** 10. 6/11 名、10. 13
 /14 名、10. 20/12 名、10. 27/14 名、11. 10
 /15 名、11. 17/14 名、11. 24/14 名、12. 1
 /14 名、12. 8/15 名。
オルガン音楽研究会 10. 5 /7 名、10. 19 /7 名、
 11. 2 /7 名、11. 16 /7 名。
コラール研究会 10. 5/6 名、10. 19/5 名、11. 2
 /6 名、11. 16/7 名。
クラヴィコード・オルガン教室 11. 2/3 名。
オルガン・クラブ 10. 12/3 名、10. 26/2 名、11. 9
 /2 名、11. 30/4 名。
ハンドベル・クワイア 10. 6/4 名、10. 13/6 名、
 11. 10/6 名、11. 24/6 名。
声楽アンサンブル 11. 24/6 名。
器楽アンサンブル 10. 20/3 名、11. 17/4 名、11. 24
 /4 名。
読書会 : 聖書 10. 6/3 名、10. 13/4 名、10. 20/
 3 名、10. 27/4 名、11. 10/5 名、11. 17/4 名、
 11. 24/4 名、12. 1/4 名。
ハンドベル・リンガーズ 10. 14/11 名、11. 18/6 名、
 12. 2/6 名、12. 15/7 名。
オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
 10. 2/1 名、10. 3/1 名、10. 5/1 名、10. 6/
 1 名、10. 9/1 名、10. 12/3 名、10. 13/1 名、
 10. 17/2 名、10. 18/1 名、10. 20/1 名、
 10. 23/1 名、10. 24/1 名、10. 25/1 名、
 10. 26/1 名、10. 27/1 名、10. 30/2 名、
 10. 31/2 名、11. 1/1 名、11. 2/2 名、11. 3
 /1 名、11. 9/2 名、11. 10/2 名、11. 13/
 2 名、11. 14/1 名、11. 15/1 名、11. 16/
 1 名、11. 17/2 名、11. 20/1 名、11. 21 /1 名、
 11. 22/1 名、11. 24/1 名、11. 27/2 名、
 11. 28/1 名、11. 29/1 名、11. 30/1 名、12. 1
 /1 名、12. 4/1 名、12. 5/2 名、12. 11/1 名、
 12. 13/1 名、12. 14/3 名、12. 18/1 名、
 12. 20/1 名、12. 22/1 名。